

石神遺跡 SD1347・SD1476 出土の土器群

—石神遺跡第8・9次

1 はじめに

考古第二研究室では、石神遺跡出土土器の整理を順次進めており、その成果を奈文研紀要に報告してきた。これまで、石神遺跡の南半（第3～7・10～12次）を中心に、比較的まとまった土器群を扱ってきた¹⁾。一方、北半の様相は、整理作業が進行中のこともあり、詳らかにされないままであった。ところが、2018年に南北溝SD640出土土器群の一部を報告するにいたり、その北への延長であるほぼ同時期の南北溝SD1347出土土器群の検討も、石神遺跡における飛鳥IVの特徴や土器群間の様相差を理解する上で必要になってきた。また、SD1347の東を平行する南北溝SD1476は、SD1347と対になって南北道路SF4100の東側溝として機能していた可能性がかねてより指摘されてきた²⁾。ここから出土した土器群の残存状況は極めて良好であり、SD1347出土土器群との比較に最適な資料群と考えた。

こうした背景から、SD1347の南部にあたる第8・9次調査区にひとまずは限定して、SD1347およびSD1476出土の土器群の整理を進めた。本稿では、SD1347南端部分の長さ約37m分、また、第9次調査区で検出したSD1476の長さ約27m分から出土した土器群の概要を報告し、土器群間の様相差を検討する。

2 出土遺構

南北溝SD1347 南の第3～8次調査区にかけて南から北に延びる南北溝SD640は、第8次調査区のほぼ中央において西北西に14mほど屈折し（東西溝SD1346）、再び北へ延びる。南北溝SD1347は屈折部分の北端より北へ延びる区間を指し、溝の北端は阿倍山田道南側溝SD4275・4285に接続する（図172）。かねてより基幹排水路と考えられ、北で西にやや振れる。SD1347Aにおいて紀年銘木簡が出土しており、7世紀後半頃から藤原宮期に比定される³⁾。

南北溝SD1347では造り替えがおこなわれている（図173上）。当初の素掘溝SD1347Aは幅約2.5m、第9次調査区北壁における遺構検出面からの深さは約0.3mを測る。

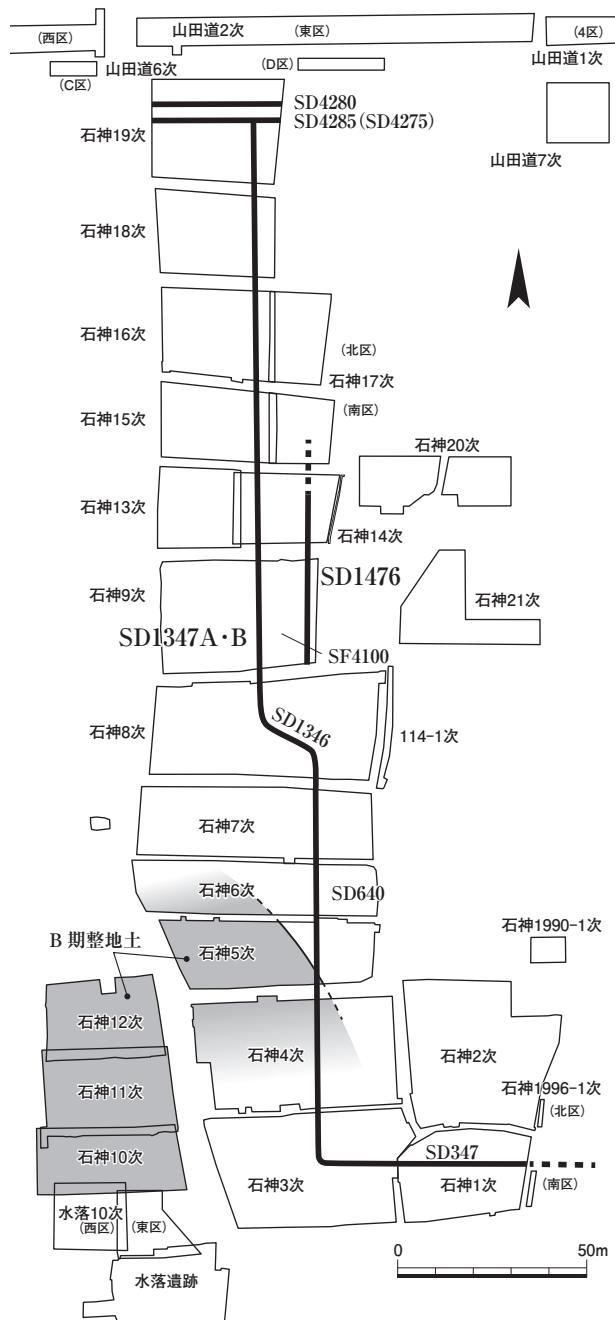


図172 石神遺跡調査区とSD1347A・BおよびSD1476の経路 1:2000

この素掘溝SD1347Aを一度埋め戻した後、その東部分を壊すかたちで溝そのものを掘削しなおし、50cm大の礫を乱雑に並べることにより西側を護岸したのが南北溝SD1347Bである。南北溝SD1347Bの残存幅は約1.2～1.4mとSD1347Aに比べ狭くなり、遺構検出面からの深さは約0.3mである。SD1347Bの堆積土のほとんどは、溝機能時の流水に由来すると考えられる粗砂（取り上げ名「灰粗砂」、「灰砂」）である。

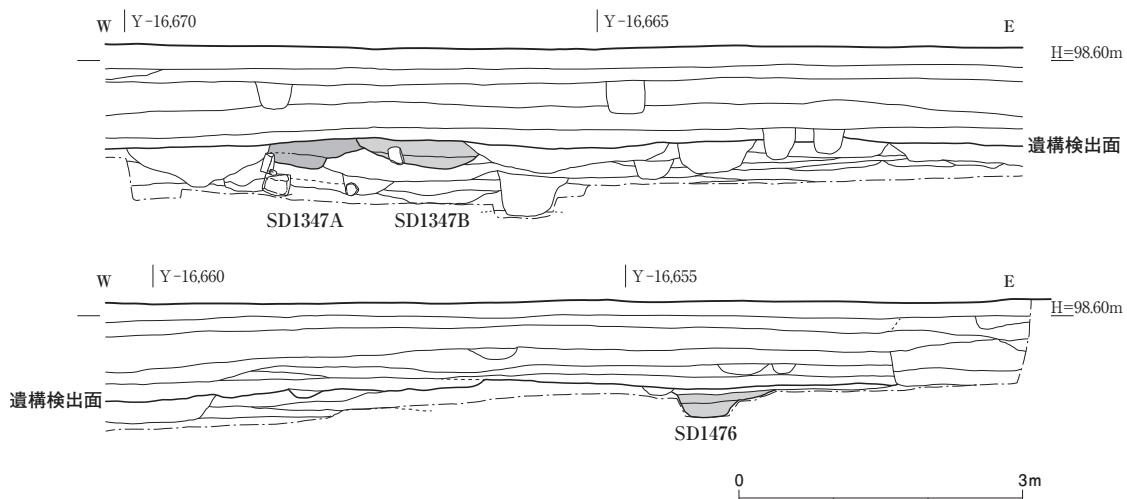


図173 石神遺跡第9次調査区北壁土層図 1:80

南北溝SD1476 南北溝SD1347より東に約13m、第9次調査区東端近くで検出した素掘溝である。北で西にやや振れており、SD1347とほぼ平行する。第9次調査区では、幅0.7~1.2mを測り、遺構検出面からの深さは南壁・北壁いずれでも約0.3mである(図173下)。この溝は北の第14次調査区に続くが、同調査区北部で浅くなりとされる。さらに北方に続いていたと考えられる⁴⁾。なお、南の第8次調査区では、これに対応する溝を検出できていない。SD1476の堆積土は上下2層に分かれるが、下層(取り上げ名「暗茶褐土」)からほとんどの土器が出土している。また、上層(取り上げ名「明茶褐土」)から出土した土器片と接合関係にあるものが複数点含まれることから、これらの土層の堆積時期に大差はなく、ほぼ一時の埋立土とみてよい。溝の時期は、7世紀後半頃から藤原宮期と考えられる。

3 SD1347A出土土器

第8・9次調査により出土したSD1347Aの土器は整理用木箱で16箱分である。破片数に基づくと、出土土器は総計2,695点(土師器1,787点、須恵器908点)を数える⁵⁾。このうち、口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できたものは全体の約26%、計667点(土師器414点、須恵器253点)であった。土師器は、供膳具に杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B蓋、鉢A、鉢H、大型鉢、高杯A、高杯C、高杯Gがあり、煮炊具に甕、鍋、甌、竈がある。土師器の供膳

具と煮炊具の比率は、約3:2である。須恵器は、供膳具に杯A、杯B、杯蓋、杯G、皿A、皿B、椀A、鉢A、鉢E、鉢F、盤、高杯があり、貯蔵具に壺A蓋、壺C、壺K、平瓶、甌、横瓶、甕A、甕B、甕Cがある。須恵器では、供膳具が全体の約77%を占めている。多くの場合、破片の接合が十分にできなかったため、図示できた資料の口縁部残存率は土師器で平均約15% (約54°)、須恵器で平均約25% (約89°) にとどまる。

土師器(図174) 1~7は杯C。資料数は少ないが、口径⁶⁾が小さいほうから、126mm(1)、149~155mm(2~4)、160~190mm(5~7)に分かれる。径高指数は1・2のみ計測可能であり、それぞれ23.05および24.54である。底部外面に指頭痕を残すもの(1・4・5)あるいは不調整(2・3・7)が目立つが、ヘラケズリを施したもの(6)もみられる。なお、口径が最も大きい7の口縁部外面にはヘラミガキが施される。

8・9は皿A。多くの出土品には底部外面に一定方向のヘラケズリがみられる(9)。まれに、指頭痕を残すもの(8)もある。

10は大型鉢。外面には横方向のヘラミガキが密に施される。

11~13は甕。大きく外反する口縁部をもつ。いずれも胴部外面に縦方向のハケ目が施されるが、胴部内面は12では横方向のナデ・ヘラケズリ、13では縦方向の指ナデと、調整に差異が認められる。

14は鍋A。胴部外面と口縁部内面にのみハケ目調整が

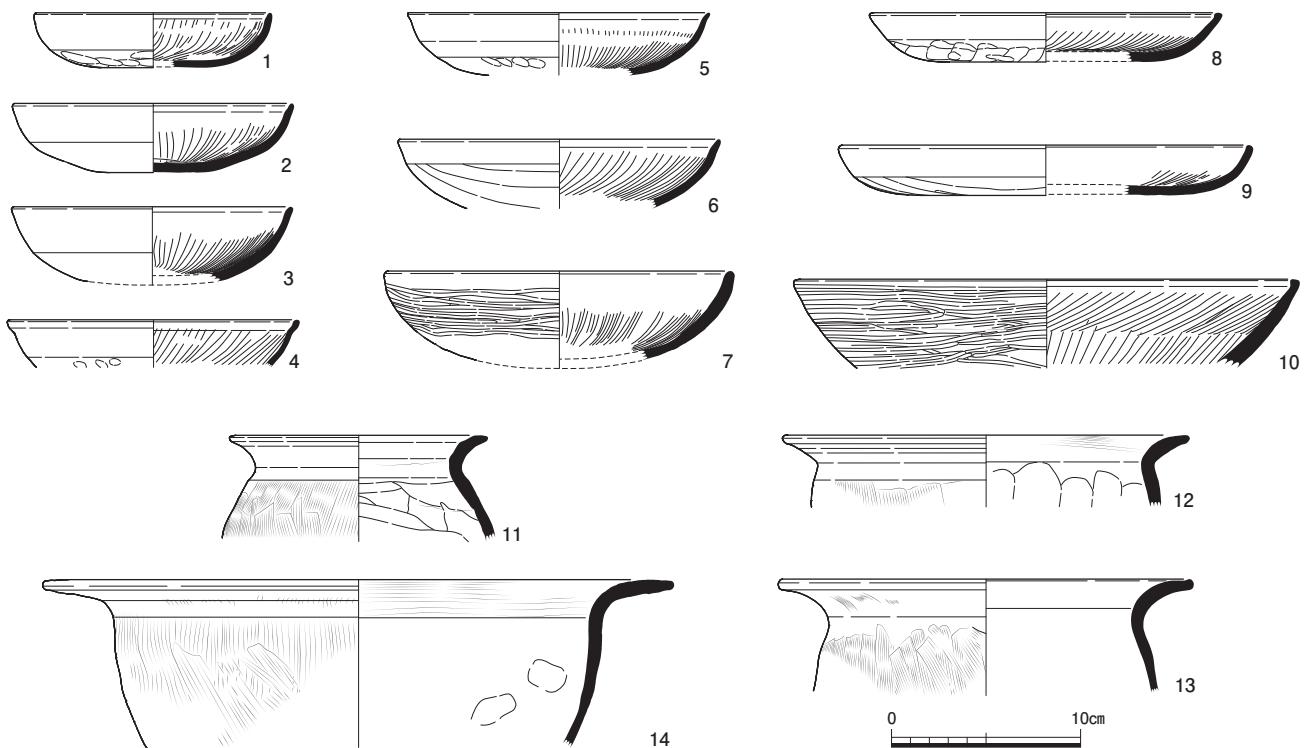


図174 南北溝SD1347A出土土師器 1:4

みられる。

須恵器(図175) 23~28は杯A。口径が小さいほうから、120mm未満(23)、130~150mm(24~27)、160mm程度(28)に分かれる。底部外面の調整はロクロケズリ(25~28)が比較的多く、小型品と中型品の一部(23・24)のみヘラ切り不調整であった。25は尾張産である。26の底部外面にはヘラ記号が残る。

29~36は杯B。杯Aに比べて口径がやや大きく、小さいほうから150~160mm(29~31)、180~195mm(32~34)、200~215mm(35・36)に分かれる。底部外面には、ロクロケズリを施すもの(29・32・33・35・36)がやや多く、他に、ヘラ切り不調整のもの(30)やヘラ切り後にナデ調整を施すもの(31・34)もみられる。33は外面に薄い降灰がみられる。33は尾張産、36は美濃須衛窯産と考えられる。

杯蓋には、口縁端部内面にかえりをもつもの(15~18)ともたないもの(20~22)があり、両者はほぼ同数存在する(表1)。かえりをもつ杯蓋は、外端径120mm未満の小型品(15・16)と外端径160~170mm程度の大型品(17・18)がある。なお、15の口縁端部外面には降灰がみられ、17の口縁端部外面には重ね焼きの痕跡が残る。かえりを

もたない杯蓋は外端径160mm以上を測り、計測できた資料中には小型品は存在しない。20の外面には部分的に薄緑色の自然釉が降着する。20は美濃須衛窯産、21は尾張産。19はかえりのある皿蓋。復元外端径は252mmを測る。外面全体に降灰がみられる。

37は皿A。復元口径は274mmであり、底部外面をロクロケズリにより調整する。内面全体に自然釉が降着。

38は皿B。かなり扁平な形態を呈する。復元口径198mm。底部外面をロクロケズリにより調整する。

39は椀A。復元口径は140mmを測り、底部外面をロクロケズリにより調整する。

40は盤。底部まで残らないが、底部近辺で横方向のヘラケズリによる調整が認められる。

甕類は比較的少数であり、4点のみ図化できた。41は甕A。胴部内面に同心円状の当て具痕が残る。外面には自然釉の降着がみられる。42は瓦質を呈する甕B。胴部外面には、平行タタキの上から横方向のハケ目を施す。胴部内面には、同心円状の当て具痕が残る。43・44は甕C。44は、胴部外面を平行タタキし、横方向のナデにより仕上げる。

上記の資料中、尾張産と確実視されるもの(21・25・

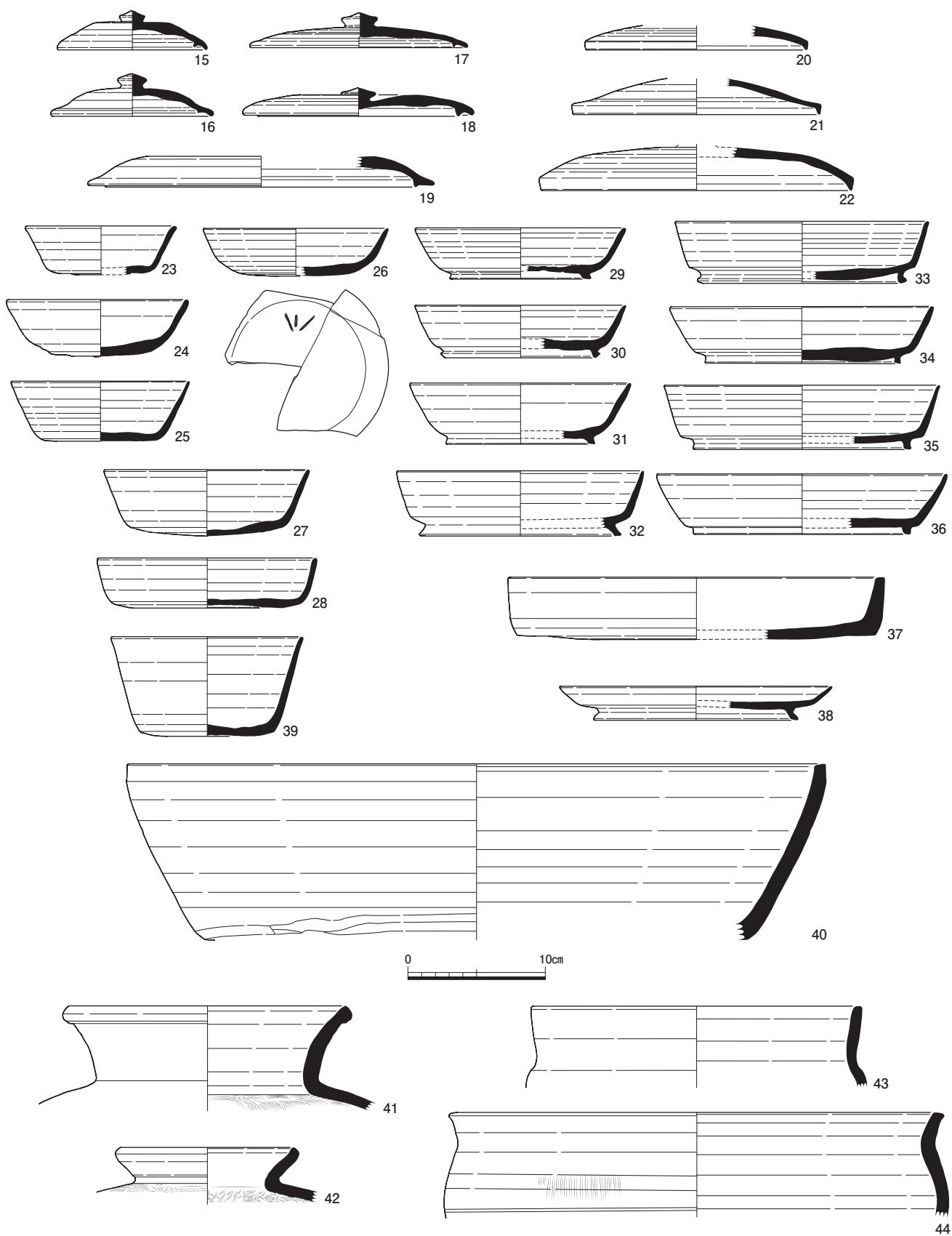


図175 南北溝SD1347A出土須恵器 1:4

33・43)と尾張産の可能性があるもの(35)が図化資料全体の約17%を占めている。

4 SD1347B出土土器

第8・9次調査により出土したSD1347Bの土器は整理用木箱で55箱分である。破片数にもとづくと、出土土器は総計14,640点(土師器9,738点、須恵器4,902点)を数える。このうち口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できたものは全体の約24%、計3,460点(土師器1,971点、須恵器1,489点)にのぼる。土師器は、供膳具に杯A、杯B、杯蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、皿C、鉢A、鉢C、鉢H、大型鉢、高杯A、高杯C、高杯Gがあり、貯蔵具に壺A、壺B、また、煮炊具に甕A、甕B、甕C、鍋A、鍋B、甑、竈がある。土師器では、供膳具が全体の約70%を占める。須恵器は、供膳具に杯A、杯B、杯蓋、杯G、杯H、杯H蓋、皿A、皿B、皿B蓋、椀A、椀B、鉢A、鉢D、鉢E、鉢F、盤、高杯があり、貯蔵具に壺A蓋、壺B、壺K、細頸壺、平瓶、穂、横瓶、提瓶、甕A、甕B、甕Cがある。須恵器では、供膳具が全体の約84%を占める。なお、ロクロ土師器の小片が1点出土しており、器種は須恵器の杯Hに相当する。SD1347Aと同様に出土土器片は十分に接合せず、図示した資料の口縁部残存率は土師器で平均約17%(約61°)、須恵器で平均約20%(約71°)にとどまる。

土師器(図176・177) 5~9は杯A。口径は175~205mmに概ね収まる。図示した資料のうち5と8の径高指数はそれぞれ30.66および24.77である。口縁部外面は横方向のヘラミガキ、底部外面はヘラケズリで調整する。なお、6の内面には連弧文と一段放射暗文を施す。

1~4は杯蓋。復元外端径は185~215mmに収まる。やや小さいもの(1・2)は、外面全体をヘラケズリ(1)か丁寧なヘラミガキ(2)で仕上げるのに対して、やや大きいもの(3・4)は、頂部を粗いヘラミガキとヘラケズリ(3)あるいは粗いヘラケズリのみ(4)で仕上げる。

10~30は杯C。口径は小さいほうから、①105.1~120.0mm(10~12)、②125.1~150.0mm(13~23)、③150.1~160.0mm(24~27)、④170.1~195.0mm(28~30)に分かれ、②が最も多い。底部外面をヘラケズリで仕上げるもの(12・15・19~21・24・25・27・28・30)と、指頭痕を残すか不調整のままとするもの(10・11・13・14・16・22・23・

26・29)が一般的であるが、胴部上半にのみヘラケズリを施すもの(17・18)も少数存在する。また、口縁部外面をナデ調整によって仕上げるものが大半を占めるなかで、横方向のヘラミガキにより仕上げるもの(22・28)がみられた。なお、こうした調整技法と法量の間には明確な相関が認められない。

31~38は杯G。口径は概ね105~130mmに集中する。31・32は口縁部が直線的に外上方にひらく。33~38は口縁部が顕著に外反する。

39は杯H。復元口径189mm。底部外面をヘラケズリし、口縁部と底部の境に明確な稜がみられる。

40~52は皿A。口径が小さいほうから、185mm未満(40・41)、195~219mm(42~48)、220mm以上(49~52)に分かれる。底部外面を、ヘラケズリ(40・43・46・49~51)、あるいは、不定方向のナデ(41・42・44・45・47・48・52)により仕上げる。

53は鉢H。復元口径242mm。底部外面にヘラケズリを施す。

54は大型鉢。復元口径318mm。口縁部外面を横方向のヘラミガキで仕上げる。

55は高杯A。脚部が欠損するものの、飛鳥IVでは極めてめずらしく、最古級の事例と考えられる。口径179mm。杯部内面に一段放射暗文と二重螺旋暗文を施す。杯部から脚部への接続部分外面は縦方向のヘラケズリ(ケズリ下げ)により仕上げる。

56~63は小型の甕。56は把手付椀様の把手が付いた小型甕。胴部外面と口縁部内面をハケ目調整、胴部内面上半を右上がりのヘラナデ・ヘラケズリで仕上げ、下半に指頭痕を残す。57~63はいずれも底部は欠損する。いずれも外面を縦方向のハケ目調整で仕上げる。内面調整に着目すると、胴部をヘラケズリするもの(58・63)、口縁部を横方向のハケ目調整、胴部をヘラケズリ・ヘラナデするもの(59・61)、胴部を横方向にハケ目調整するもの(62)、胴部内面を不定方向ナデで仕上げるもの(57・60)がある。

64~73はやや大型の甕。ナデで仕上げる66を除いて、いずれも胴部外面を縦方向のハケ目で仕上げる。内面の調整をみると、胴部に縦方向のヘラケズリを施すもの(70)、口縁部に横方向のハケ目、胴部にヘラケズリを施すもの(64~66・68)、口縁部から胴部上半にかけてハケ

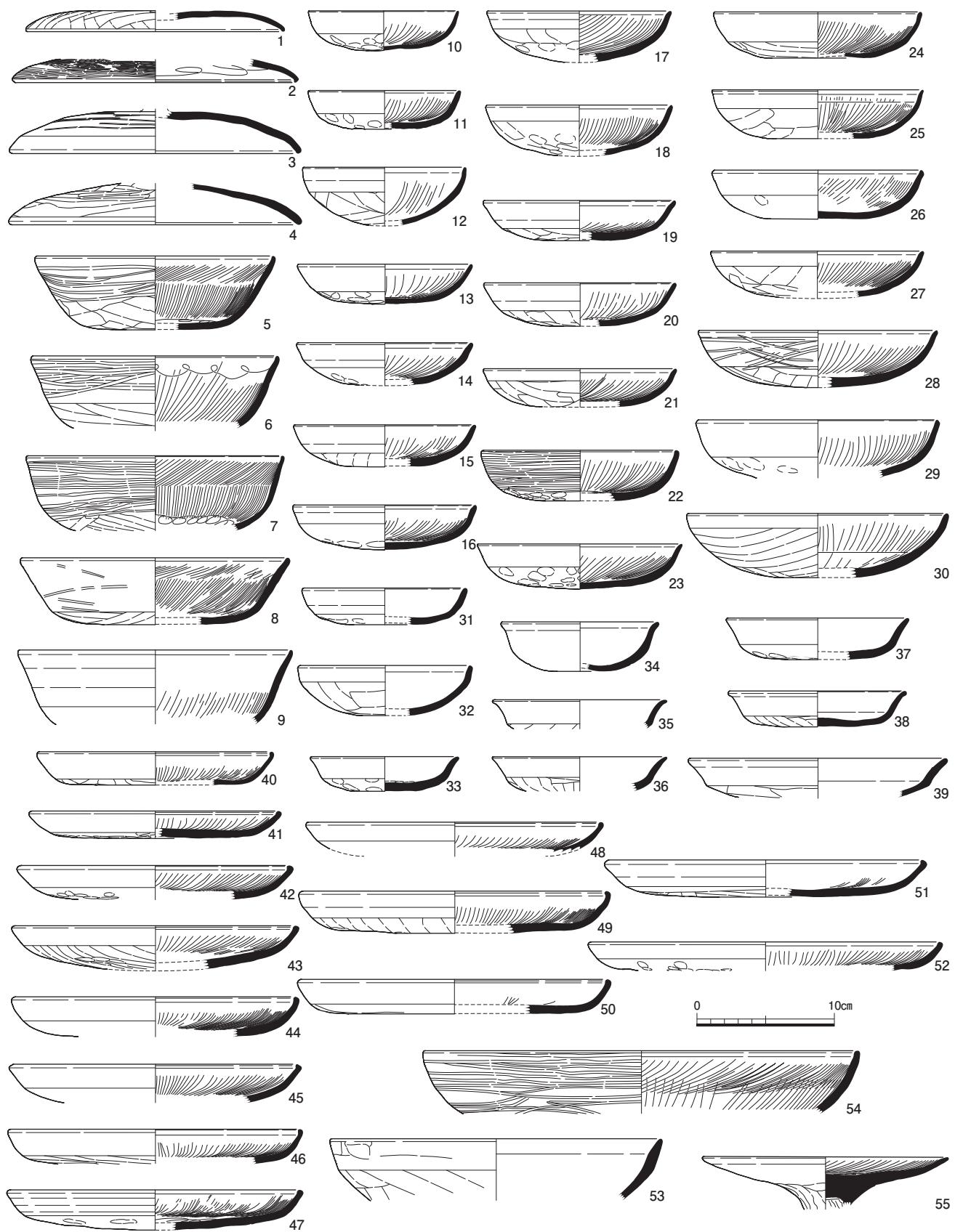


図176 南北溝SD1347B出土土師器(1) 1:4

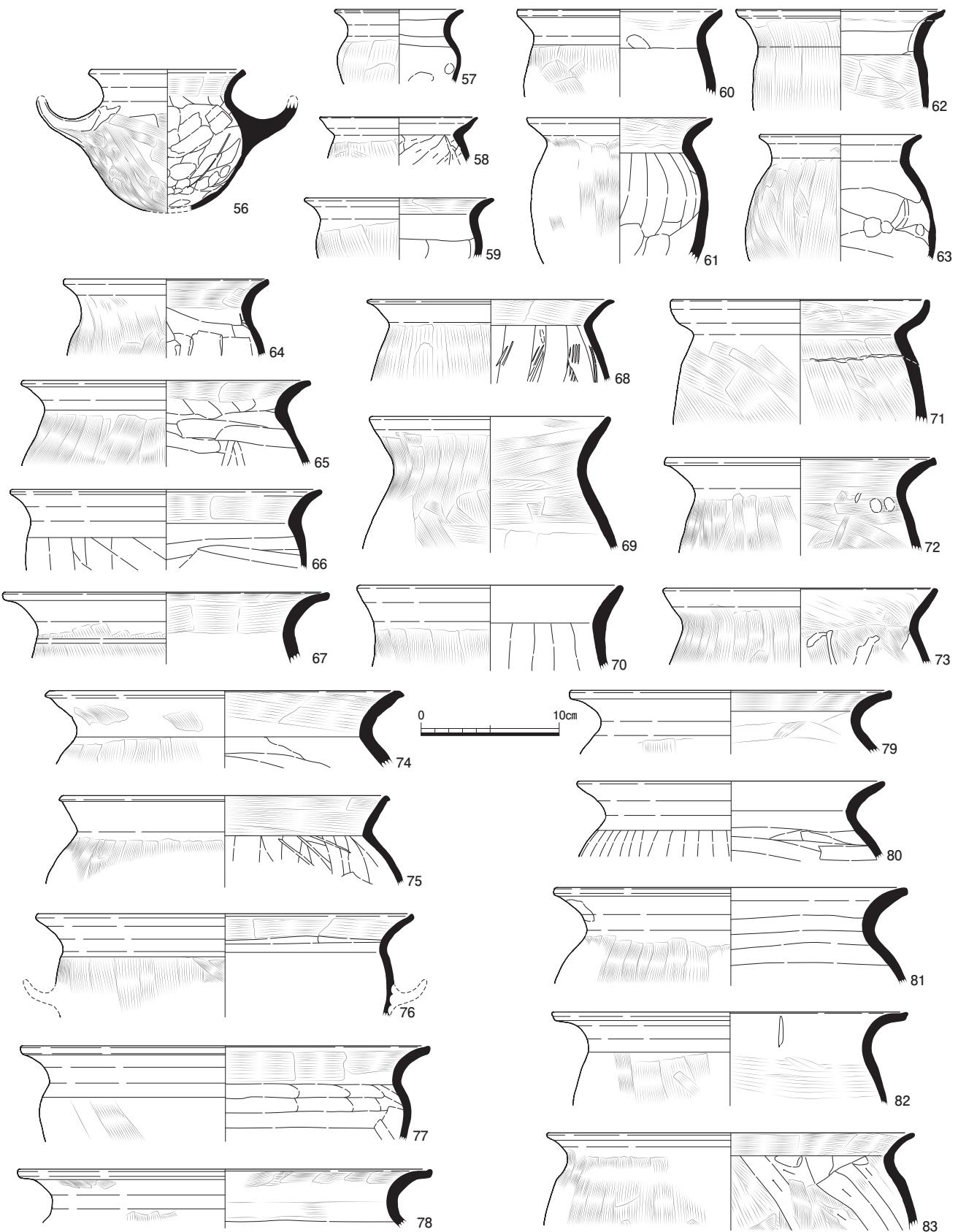


図177 南北溝SD1347B出土土師器 (2) 1 : 4

目を施すもの（69・72・73）の他、受口口縁をもち、内面全体をハケ目で仕上げるもの（71）と口縁部に粗いハケ目を施すもの（67）が確認できた。

74～83は大型の甕。このうち76は、胴部外面に把手の取付痕跡が残る。胴部外面を縦方向のハケ目で仕上げるものが多いなか、ヘラナデで仕上げるもの（80）も稀にみられる。内面の調整をみると、口縁部に横方向のハケ目調整、胴部にヘラケズリを施すもの（74～79・83）が圧倒的に多く、このほかに、内面全体を横方向にナデ調整するもの（81）や胴部に横方向のハケ目を施すもの（82）もみられる。

須恵器（図178・179） 101～110は杯A。口径は小さいほうから、105～120mm（101・102）、125～140mm（103～107）、150～160mm（108・109）、約205mm（110）に分かれ。底部外面の調整は、小型品でヘラ切り不調整（101～104）が多く、そのほか（105～110）ではロクロケズリで仕上げる。106の外面に薄い降灰あり。

111～123は杯B。口径が小さいほうから、100mm（111）、130～160mm（112～114）、175～200mm（115～121）、220mm以上（122・123）に概ね分かれ。このうち口径175～200mmの資料の多く（115～120）が、外端径185～200mmのかえりをもたない杯蓋（96～99）に対応すると考えられる。ヘラ切り後ナデを施す113を除き、底部外面をロクロケズリにより仕上げる。115の外面全体に薄い降灰がみられ、121の底部内面には同心円状の當て具痕がわずかに残る。比較的大型品には、尾張産（117・120・122）と、尾張産の可能性があるもの（121・123）が含まれる。また、118・119は美濃須衛窯産と思われる。

84～100は杯蓋。84～87はかえりをもつ杯蓋、88～100はかえりをもたない杯蓋である。出土数全体をみると、かえりをもつものとかえりをもたないものの比率は1：3となり、かえりをもたない杯蓋が圧倒的に多い。かえりをもつ杯蓋は、外端径125mm未満（84）、約150～160mm（85・86）、175～180mm（87）に分かれ。かえりをもたない杯蓋は、口径130～140mm（88～90）、150～170mm（91～95）、185～200mm（96～99）、220mm以上（100）があり、かえりをもつ杯蓋よりやや大きめである。なお、84・88の内面には降灰がみられ、100の外面全体に自然釉が降着する。88・98は尾張産の可能性があり、100は美濃須衛窯産と思われる。

124～137は椀A。口径が小さいほうから、120mm未満（124）、125～135mm（125～129）、139～150mm（130～135）、160mm（136）、208mm（137）に分かれ、125～150mmに集中する傾向がある。底部外面をロクロケズリで仕上げる。これらには、尾張産（127・129・130・135・136）および尾張産と思しきもの（125）の他、美濃須衛窯産（124・132）も混じる。

138・139は椀B。口径は120～150mmに収まり、椀Aと類似する。いずれの底部外面もロクロケズリにより仕上げる。139は美濃須衛窯産の可能性がある。

143～148は皿A。口径は、150mm未満（143）、250mm程度（144）、300～365mm（145～148）に分かれ、大型品が目立つ。146・148は尾張産、145は尾張産の可能性がある。

140～142は皿蓋。いずれも口径は280mmを超える。140は尾張産と思われる。

鉢D（149）・鉢E（150）は稀有な存在である。いずれも底部までは残らない。

151は壺A蓋。頂部にロクロケズリを施す。

152は平瓶。口縁端部のみ欠損する。胴部外面下半をロクロケズリし、底部には高台が付く。上面に自然釉の降着がみられる。

153～160は甕。153・154は甕A。頸部以下がほとんど残らない。頸部付け根部分の外面に、153では降灰、154では自然釉の降着がみられる。155～157は甕B。胴部外面を平行タタキの後にカキ目調整し、胴部内面には同心円状の當て具痕が明瞭に残る。158～160は甕C。158では胴部外面を平行タタキの後にカキ目を施すが、159・160では胴部外面をナデ調整で仕上げる。また、159・160の胴部内面にはロクロナデにより磨り消された同心円状の當て具痕がわずかに残る。

上記の資料中、尾張産と確実視されるもの（117・120・122・127・129・130・135・136・146・148・151）と尾張産と思しきもの（88・98・105・121・123・125・140・145・150・152・153・159）が図示した資料全体の約30%を占める。

5 SD1476出土土器

第8・9次調査により出土したSD1476の土器は整理用木箱で21箱分である。破片数に基づくと、出土土器は総計2,150点（土師器1,661点、須恵器489点）を数える。

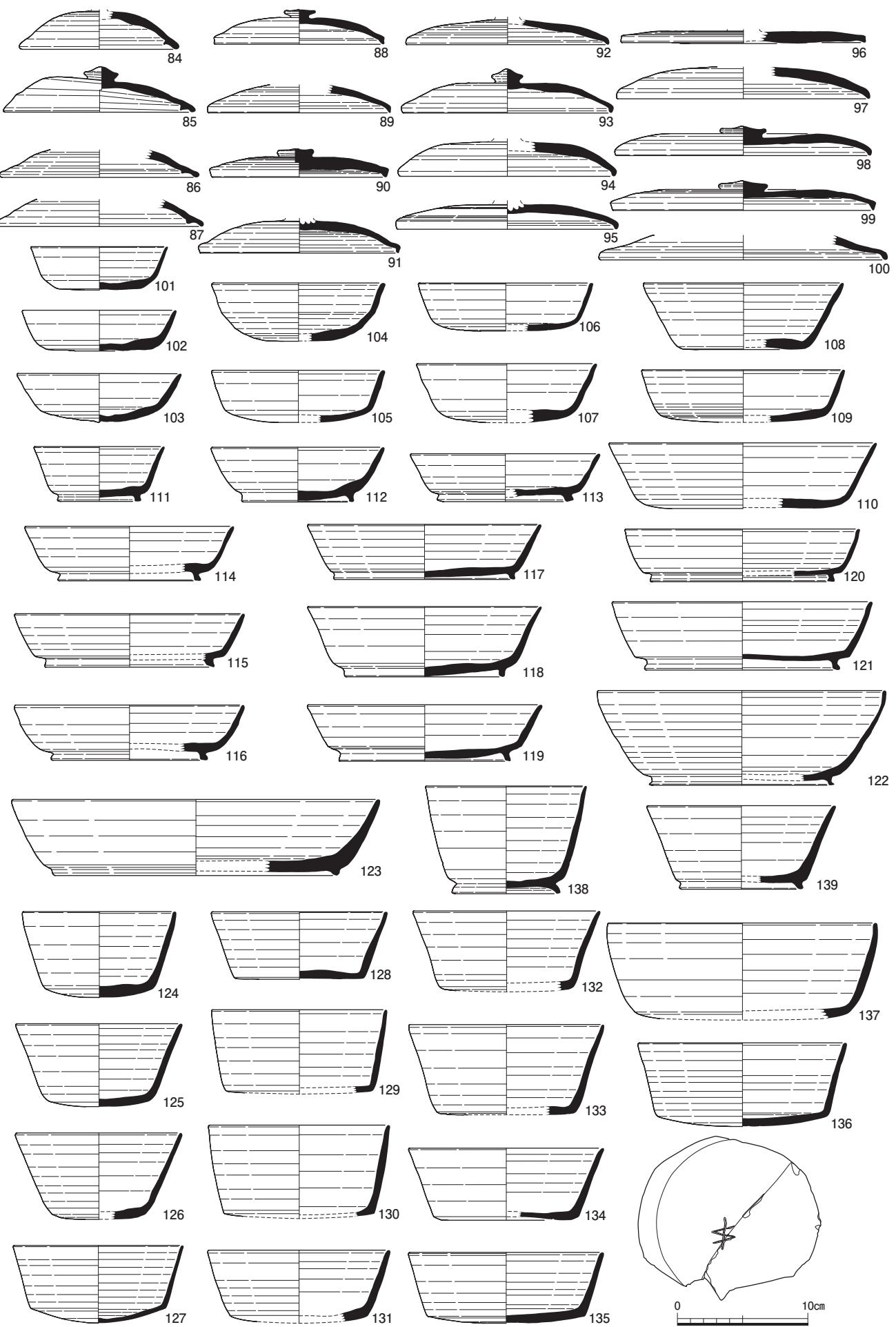


図178 南北溝SD1347B出土須恵器（1） 1：4

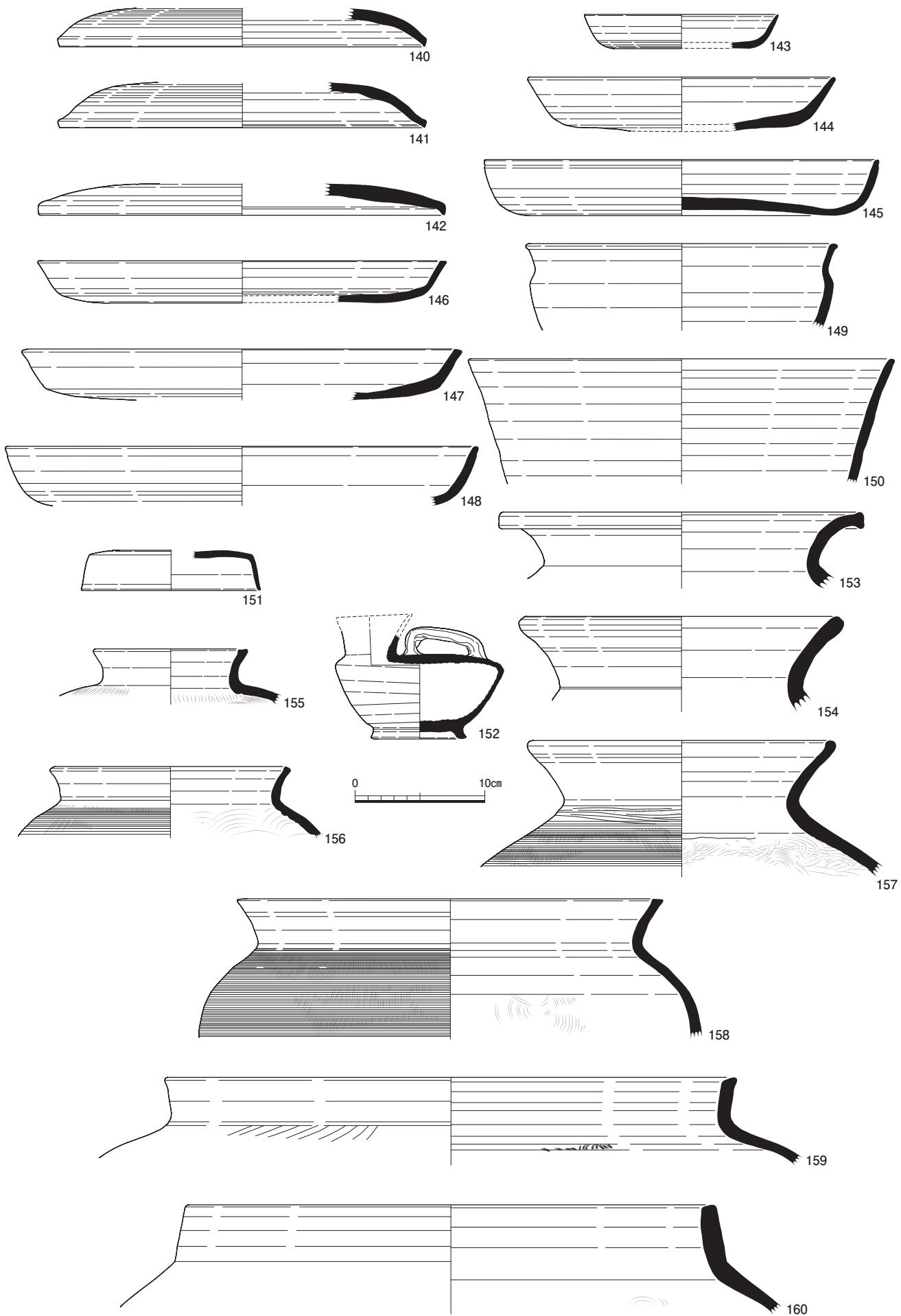


図179 南北溝SD1347B出土須恵器(2) 1:4

SD1347A・Bに比べて、土師器に対する須恵器の出土比率が少ない。このうち口縁部や底部などの特定部位の破片であり、大まかにでも器種分類できたものは全体の約25%、計546点（土師器416点、須恵器130点）にのぼる。土師器は、供膳具に杯A、杯B、杯C、杯G、杯H、皿A、皿B、皿C、椀C、鉢A、鉢H、大型鉢、高杯A、高杯C、高杯Gがあり、貯蔵具に壺A、壺Bが、また、煮炊具に甕A、甕B、甕C、鍋A、甌、竈がある。土師器の供膳具と貯蔵具・煮炊具の比率は、概ね3:1である。須恵器は、供膳具に杯A、杯B、杯蓋、杯G、杯H、杯H蓋、皿A、皿B、椀A、鉢A、鉢E、盤、高杯があり、貯蔵具に、壺A蓋、壺C、長頸壺蓋、平瓶、憩、提瓶、甕A、甕B、甕Cがある。須恵器の供膳具と貯蔵具の比率は約4:1であり、SD1347Aと類似している。なお、ロクロ土師器の小片が1点出土しており、器種は須恵器の杯Hに相当する。SD1476出土土器の遺存・接合状況はSD1347A・Bに比して格段に良好であり、図示した資料の口縁部残存率は土師器で平均約40%（約142°）、須恵器で平均約45%（約163°）におよぶ。

土師器（図180・181） 1~12は杯A。口径144mm（1）と217mm（12）の2点を除き、口径170~195mmに収まる。図示した資料のうち7点（1・2・5・8~11）については器高が計測可能であり、径高指数は平均28.52（中央値28.66、最小値26.94、最大値30.23）を示す。口縁部外面にヘラミガキを施し、底部外面をヘラケズリで仕上げるものが多い。また、内面の暗文は二段放射暗文が通有であるが、2の内面にのみ一段放射暗文がみられる。

13は杯B。復元口径は181mm。器面調整は杯Aと同様。14~44は杯C。口径が小さいほうから、①105.1~125.0mm（13~19）、②125.1~140.0mm（20~27）、③140.1~165.0mm（28~39）、④170.1~190.0mm（40~44）に分かれ、③がやや多い。底部外面をナデで仕上げ指頭痕を残すもの（14~18・20・22・25・27・30~36・41）がとくに顕著であるが、ヘラケズリで仕上げるもの（13・19・40）、ヘラケズリを施し指頭痕を残すもの（21・24・26・28・37）もみられる。大型品には、口縁部外面に横方向のヘラミガキ、底部外面にヘラケズリを施すもの（43・44）もある。27の内面には多角形の線刻、36の底部内面には「×」印のヘラ記号あり。

45・46は杯H。小型品（45）のほうが胴部外面の屈曲

が明瞭で、口縁部の外反も顕著である。

47は高杯Cの杯部。底部外面に無数の指頭痕を残す。

48~52は皿A。口径は210~235mmに収まる。底部外面をみると、ヘラケズリを施すもの（48・49・52）と、ナデで仕上げるもの（50・51）がある。なお、52の底部外面には線刻がある。

53は皿B。口径は285mmであり、皿Aよりも大型である。口縁部外面に横方向のヘラミガキを施し、底部外面をヘラケズリで仕上げる。

54は大型鉢。復元口径386mm。外面にヘラミガキを密に施し、底部外面をヘラケズリする。

55・56は鉢H。いずれの口縁部も内側にやや彎曲し、口縁部と胴部を分かつ稜はあまり明瞭ではない。

57は鉢A。外面を横方向にヘラミガキ、内面を横方向にハケ目調整。底部外面にヘラケズリを施す。

58・59は鍋A。58は、胴部外面と口縁部をハケ目調整、胴部内面を横方向のヘラケズリの後にやや不規則な縦方向のハケ目により仕上げる。59は、胴部外面上半をハケ目調整、下半をヘラナデ調整し、内面上半を横方向のヘラナデ、内面下半を横方向のハケ目により仕上げる。

60~64は小型の甕A。口縁部内面に横方向のハケ目、胴部内面にヘラケズリあるいはナデを施すもの（60・61・63・64）と、口縁部内面に横方向のハケ目、胴部内面にナデを施し指頭痕を残すもの（62）がみられる。65~68は大型の甕。上半の一部のみ残存するため、把手の有無は不明。口縁部内面に横方向のハケ目、胴部内面にヘラケズリ・ナデを施すもの（65・68）、胴部内面をヘラケズリで仕上げるもの（66）、内面上半全体に横方向のハケ目を施すもの（67）がみられた。69は甕B。胴部外面全体をハケ目調整するが、上半には縦方向の細かいハケ目、下半には横方向のより粗いハケ目を施す。胴部内面には、上半に縦方向のヘラケズリを施した後、下半をハケ目調整する。70・71は甕C。70では、口縁部内面から胴部内面上部にかけて横方向のハケ目を施し、胴部内面をヘラケズリで仕上げる。71では胴部内面に縦方向のヘラナデを施し、下半部に指頭痕が残る。

須恵器（図182） 81~83は杯A。口径はそれぞれ、119mm（81）、142mm（82）、168mm（83）である。底部外面をみると、小型品（81）ではヘラ切り不調整、その他（82・83）ではロクロケズリを施す。82の外面に降灰がみられる。

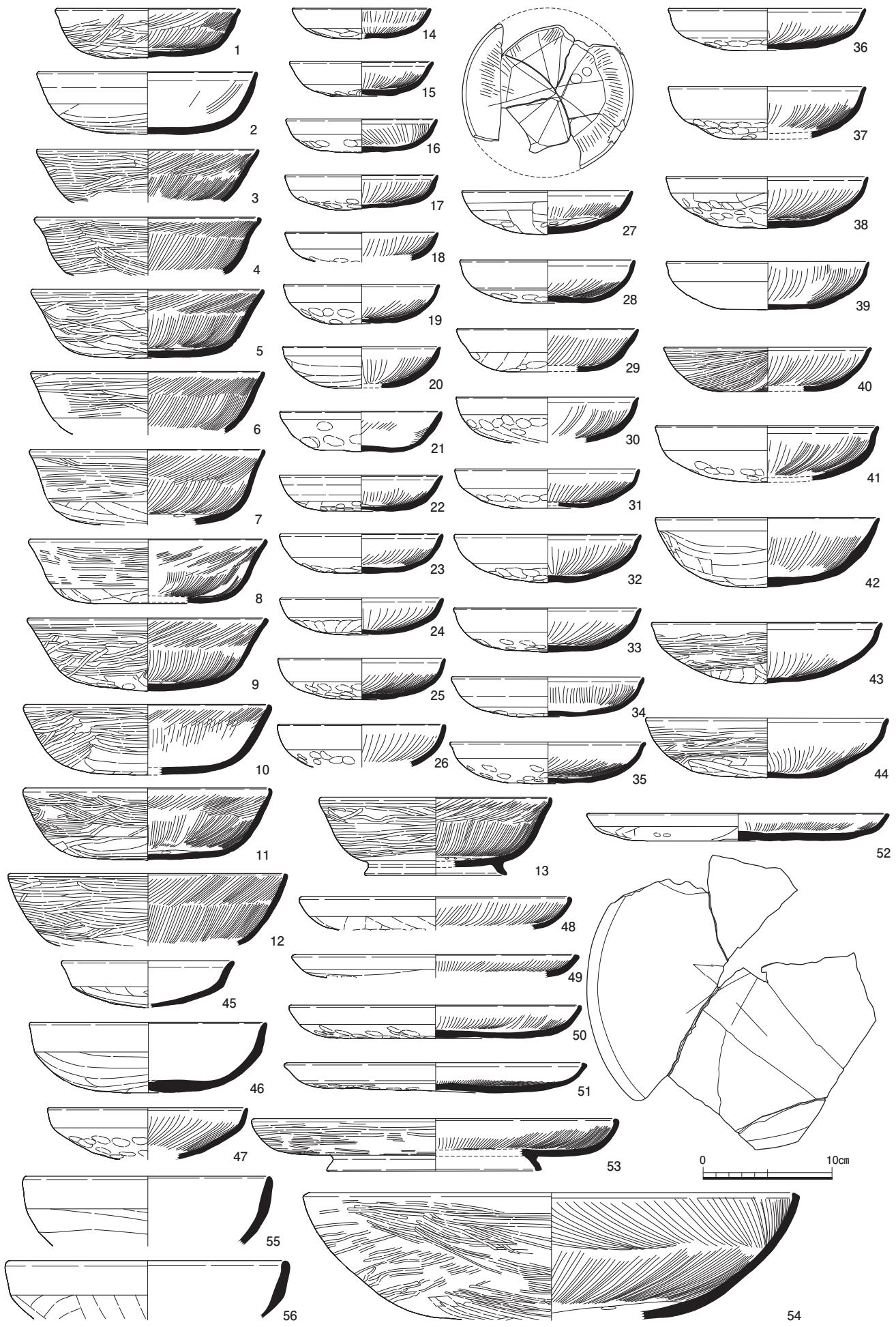


図180 南北溝SD1476出土土師器(1) 1:4

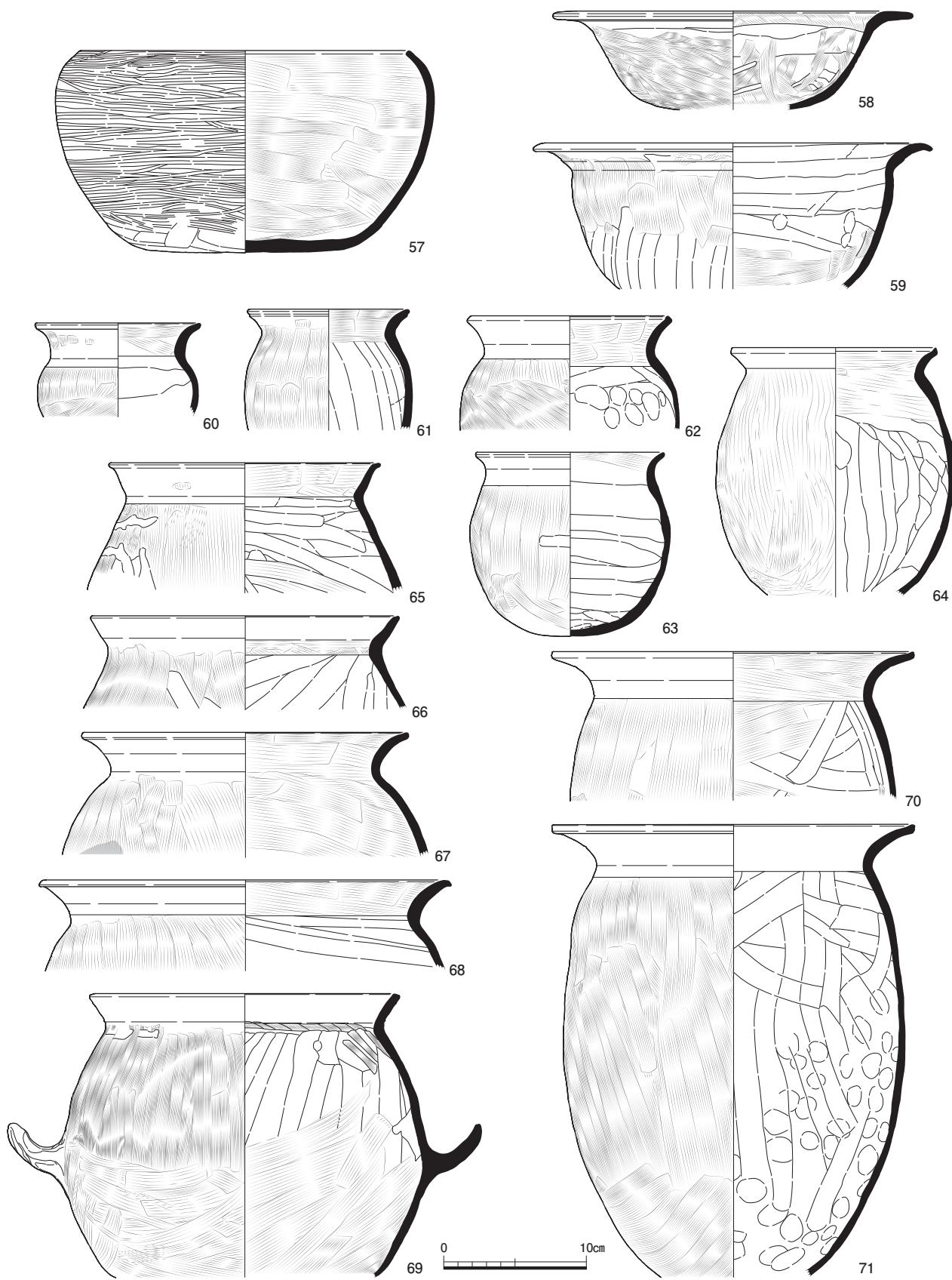


図181 南北溝SD1476出土土師器（2） 1:4

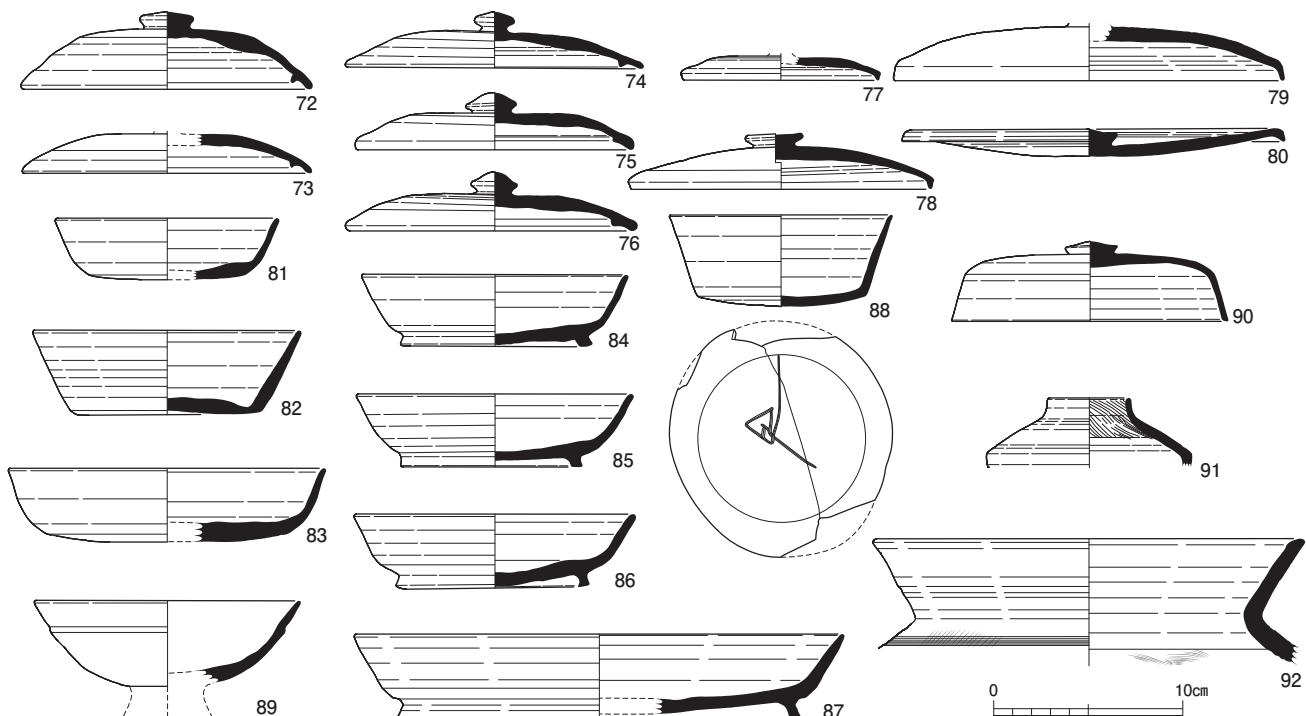


図182 南北溝SD1476出土須恵器 1 : 4

84～86は杯B。口径はいずれも、140～150mmにまとまる。底部外面の調整は多様であり、ロクロケズリ（85）とナデ調整（84）の他、底面中央にのみ一定方向のヘラケズリを施すもの（86）がある。

72～80は杯蓋。72～76はかえりをもつ杯蓋、77～80はかえりをもたない杯蓋であり、両者はほぼ同率で存在する。かえりをもつ杯蓋の外端径は、145～160mmに集中する。かえりをもたない杯蓋の口径は若干ばらつき、105mm未満（77）、約160mm（78）、200～210mm（79・80）に分かれ。78・80の外面全体に薄い降灰が見られ、79の外面全体には薄緑色の自然釉が降着する。このうち3点（77～79）は尾張産の可能性がある。

87は皿B。復元口径259mm。底部外面をロクロケズリで仕上げる。内面の一部に墨痕が残る。

88は椀A。復元口径118mm。底部外面をロクロケズリにより調整し、焼成前にヘラ記号が記される。尾張産。

89は高杯の杯部と思われる。焼成が甘く器面が磨耗し、調整を観察できない。

90は壺A蓋。頂部にロクロケズリを施す。尾張産。

91は壺C。口縁部から頸部の内面に絞り痕が残る。胴部外面をロクロヘラナデにより仕上げる。

92は甕C。胴部外面を平行タタキした後にカキ目を施

し、胴部内面には同心円状の当て具痕が残る。胴部外面に自然釉が降着する。

上記の資料中に、尾張産と確実視されるもの（78・87・90）と尾張産の可能性があるもの（77・79・91）が含まれる。

6 まとめ

SD1347A・SD1347B・SD1476出土土器はあきらかに飛鳥IVの様相を示している。以下では、これらの土器群間にみられる共通点・相違点を、統計的および形態・調整技法の観点から整理する。

統計的検討 3つの溝からの出土土器のうち、器種がある程度判明したものの個体数（同一個体破片数）を示した（表17）。共通する顕著な特徴は、土師器杯Cの比率が大きいことである。いずれの溝においても、杯Cが全点数に占める比率は20%前後に上る。また、須恵器杯類が全点数に占める比率もやや大きい傾向がある。

この他にみられるいくつかの明確な特徴は、SD1347BとSD1347A・SD1476の間の差異を示している。まず、須恵器杯蓋について、SD1347Bではかえりをもつ杯蓋とかえりをもたない杯蓋の比率が約1:3であるのに対して、SD1347A・SD1476では両者の比率はほぼ1:1と

表17 SD1347A・BおよびSD1476出土土器の器種組成

土師器(個体数)	SD1347A	SD1347B	SD1476	須恵器(個体数)	SD1347A	SD1347B	SD1476
杯A	23 (5.6)	32 (16)	15 (3.5)	杯A	7 (2.8)	38 (2.6)	1 (0.8)
杯B	0 (0)	3 (0.2)	1 (0.2)	杯B	13 (5.1)	30 (2.0)	4 (3.1)
杯B(高台のみ)	4 (1.0)	52 (2.6)	5 (1.2)	杯G	3 (1.2)	15 (1.0)	2 (1.5)
杯蓋	3 (0.7)	49 (2.5)	0 (0)	杯H	0 (0)	11 (0.7)	9 (6.9)
杯・杯蓋	杯A/B(細分不可)	51 (12.3)	274 (13.9)	杯II蓋	0 (0)	5 (0.3)	1 (0.8)
	杯C	75 (18.1)	409 (20.8)	杯蓋(かえりあり)	28 (11.1)	77 (5.2)	15 (11.5)
	杯G	17 (4.1)	129 (6.5)	杯蓋(かえりなし)	26 (10.3)	251 (16.9)	15 (11.5)
	杯H	8 (1.9)	42 (2.1)	杯蓋(細分不可)	15 (5.9)	73 (4.9)	1 (0.8)
	その他	0 (0)	1 (0.1)	杯・椀口縁部(細分不可)	72 (28.5)	496 (33.3)	21 (16.2)
				杯・椀高台(細分不可)	22 (8.7)	113 (7.6)	8 (6.2)
皿	皿A	15 (3.6)	66 (3.4)	皿A	4 (1.6)	46 (3.1)	2 (1.5)
	皿B	0 (0)	0 (0)	皿B	1 (0.4)	4 (0.3)	1 (0.8)
	皿A/B(細分不可)	26 (6.3)	144 (7.3)	皿A/B(細分不可)	0 (0)	17 (1.1)	2 (1.5)
	皿C	0 (0)	10 (0.5)	皿蓋	0 (0)	12 (0.8)	0 (0)
椀	椀C	0 (0)	0 (0)	椀A	3 (1.2)	19 (1.3)	1 (0.8)
	鉢A	7 (1.7)	36 (1.8)	椀B	0 (0)	11 (0.7)	0 (0)
鉢	鉢C	0 (0)	10 (0.5)	鉢A	4 (1.6)	27 (1.8)	1 (0.8)
	鉢H	5 (1.2)	22 (1.1)	鉢D	0 (0)	1 (0.1)	0 (0)
	大型鉢	1 (0.2)	2 (0.1)	鉢E	2 (0.8)	10 (0.7)	1 (0.8)
	高杯A	0 (0)	28 (1.4)	鉢F	1 (0.4)	6 (0.4)	0 (0)
高杯	高杯C	1 (0.2)	2 (0.1)	鉢(細分不可)	0 (0)	23 (1.5)	0 (0)
	高杯G	3 (0.7)	3 (0.2)	盤	10 (4.0)	4 (0.3)	4 (3.1)
	高杯脚部	7 (1.7)	45 (2.3)	高杯	1 (0.4)	4 (0.3)	1 (0.8)
壺	壺A	0 (0)	6 (0.3)	高杯脚部	5 (2.0)	10 (0.7)	9 (6.9)
	壺B	3 (0.7)	11 (0.6)	壺A蓋	1 (0.4)	5 (0.3)	4 (3.1)
	甕A	0 (0)	8 (0.4)	壺B	0 (0)	1 (0.1)	0 (0)
甕	甕B	6 (1.5)	1 (0.1)	壺C	1 (0.4)	0 (0)	1 (0.8)
	甕C	0 (0)	1 (0.1)	壺K	1 (0.4)	1 (0.1)	0 (0)
	甕(細分不可)	53 (12.8)	250 (12.7)	壺(細分不可)	3 (1.2)	71 (4.8)	10 (7.7)
鍋	鍋A	1 (0.2)	1 (0.1)	長頸壺蓋	0 (0)	0 (0)	1 (0.8)
	鍋B	0 (0)	2 (0.1)	細頸壺	0 (0)	2 (0.1)	0 (0)
	鍋(細分不可)	3 (0.7)	3 (0.2)	平瓶	2 (0.8)	24 (1.6)	2 (1.5)
	煮炊具類口縁(細分不可)	64 (15.5)	152 (7.7)	醜	4 (1.6)	1 (0.1)	2 (1.5)
	煮炊具類把手(細分不可)	25 (6.0)	96 (4.9)	横瓶	1 (0.4)	1 (0.1)	0 (0)
	横瓶	0 (0)	1 (0.1)	提瓶	0 (0)	2 (0.1)	1 (0.8)
	甕	7 (1.7)	31 (1.6)	甕A	7 (2.8)	28 (1.9)	2 (1.5)
	甕	6 (1.5)	49 (2.5)	甕B	12 (4.7)	35 (2.4)	7 (5.4)
	計	414 (100)	1,971 (100)	甕C	4 (1.6)	15 (1.0)	1 (0.8)
*1 () 内数値は各溝出土土器群内での% (小数点第二位を四捨五入) を表す。				計	253 (100)	1,489 (100)	130 (100)

なる。また、土師器杯Aと土師器杯Bの比率をみると、SD1347Bでは土師器杯BがSD1347A・SD1476よりも高い比率を示し、ほぼ同数の杯蓋も出土しているのに対して、SD1347A・SD1476では土師器杯Aが相対的に多い。3つの溝において出土した土師器杯A・Bの全出土土師器点数に対する比率はほぼ同じ(4~6%)であることから、これは一応有意な傾向差とみなせるだろう。

形態・調整技法の検討 上記の出土土器群間の差異を検証する目的で、復元資料が比較的豊富なSD1347BおよびSD1476から出土した土師器杯A・Cに焦点を絞って、形態・器面調整技法の特徴を押さえておきたい。

土師器杯Aは、本稿で扱った溝出土土器の中では、杯Cに比べて少ない傾向がある。また、口径150mm未溝の小型品は極めて少ない。このように限られた数量にも関わらず、概して、SD1347B出土の杯Aに比べてSD1476出土の杯Aの方が、外面のより広い範囲にヘラミガキを

施す傾向がある。一方、両者の形態に明確な差異は認められない。

土師器杯Cは、いずれの溝からも多量に出土している。出土溝別の口径分布には有意差が認められず、いずれも概ね4法量に分かれることは既に確認済みである。全体形と口径140mm未溝の小型品の径高指数には大差ないが、図示した口径140mm以上の中・大型品の径高指数は、SD1347B出土の杯Cの平均23.21(標本数10点、中央値23.11、最小値22.10、最大値24.49)に対して、SD1476出土の杯Cは平均24.49(標本数16点、中央値24.36、最小値21.21、最大値31.10)を示し、SD1476のほうがやや深手の傾向がある。

土器群間の差異の評価 上記の差異の一部は、SD1347BとSD1347A・SD1476の間の「時期差」を反映している可能性がある。遺構の重複関係をみると、SD1347Aは一度埋め立てられた後にSD1347Bとして再掘削されてお

り、SD1347AがSD1347Bより古い。また、SD1347Aからは辛巳年（天武天皇10年、681）の「五十戸」表記の木簡が出土しており、年代の指標とすることができます。こうした点を念頭に、『紀要 2018』における考察を参考すると⁷⁾、須恵器杯蓋のかえりをもつ個体ともたない個体の比率（後者の増加）や土師器杯Cの法量・径高指数（大型化・浅手化）は、石神遺跡内における型式変化の方向性をある程度示しうると評価できる。以上から暫定的に、SD1347A・SD1476出土土器群は7世紀後半（遺構変遷におけるC期前半）に、SD1347B出土土器群は7世紀末頃（C期後半）に改めて位置づけられる⁸⁾。

なお、C期にはSD1347とSD1476の間に南北道路SF4100が通るとされてきた⁹⁾。しかし、上記の結果に照らせば、両溝が道路側溝として同時併存したのは7世紀後半の限られた期間であったということになる。

SD640出土土器群との比較 最後に、本稿で扱った土器群を南北溝SD640出土土器と比較し、両者の関係性について考えておきたい。SD640出土土器のうち、石神遺跡第3～5次調査区から出土した供膳具は『紀要 2018』において既報告である。SD640から出土した土師器杯Cは、これ以前には存在しなかった口径180～195mmの大型品を含むのみならず、前時期のB期整地土出土品と比べて、全体的に大型化する傾向を示す。同じく土師器杯Cの径高指数は平均23.4であり、B期整地土出土品に比して浅手化する。また、SD640出土の須恵器杯蓋のうち、かえりをもつ個体の比率は約25%にとどまり、かえりをもつ個体が70%を占めるB期整地土に比べてはるかに少ない。

こうした特徴は、先にみたSD1347B出土土器とあきらかに類似している。SD1347B出土の土師器杯Cは口径170～195mmの大型品を含み、浅手である。また、須恵器杯蓋は、かえりをもつ個体の比率は約25%のみであった。これに対して、SD1347A・SD1476出土の土師器杯CはSD1347Bと同様に口径170～195mmの大型品を含むが、定量的に計測できたSD1476出土品はSD1347B出土品に比べやや深手である。加えて、かえりをもつ須恵器杯蓋の比率は、約半分に及ぶ。

以上から、SD640およびSD1347B出土土器は飛鳥IV内におけるほぼ同時期の所産と考えられる。さらに、SD1347A・SD1476出土土器は、B期整地土出土土器と

SD640出土土器の中間的な様相とも捉えられ、両者の間の時期に位置づけることができるかもしれない。ただし、比較が供膳具の一部に限られたことには留意する必要があるだろう。今後、「時期差」を的確に示しうる指標を追及するのと同時に、土器群間の総合的な比較により上記の見解を検証していく必要がある。（山藤正敏）

謝辞

本報告掲載の図作成には、三次元計測機を用いた。本機を用いた調査・研究手法の検討と確立にあたり、室員から数々の支援を得た。また、須恵器の産地同定に際して、京都国立博物館の尾野善裕氏にご教示いただいた。あわせて感謝を記したい。

註

- 1) 尾野善裕・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『紀要 2016』。尾野善裕・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の湖西窯産須恵器」『紀要 2017』。森川実・大澤正吾「石神遺跡B期整地土・SD640出土の土器群－石神遺跡第3～5次・第10～12次」『紀要 2018』。土橋明梨紗「石神遺跡SK1244・1245・1246・1247出土の土器群－石神遺跡第7次」『紀要 2019』。土橋明梨紗「石神遺跡出土の東北系黒色土器－石神遺跡第3～8・11次」『紀要 2020』。
- 2) 石橋茂登ほか「石神遺跡（第15次）の調査－第122次」『紀要 2003』。
- 3) 小田裕樹ほか「石神遺跡（第19・20次）の調査－第145・150次」『紀要 2008』。
- 4) 石橋茂登ほか「石神遺跡の調査－第116次」『紀要 2002』。
- 5) 破片の計数は、接合関係をあきらかにしたうえで、確實に「同一個体」と考えられる破片をまとめて「1点」とした。基本的には、口縁部など各個体を明確に示す部位（指標部位）に重点を置き、これと「同一個体」に属すると考えられる胴部片や底部片を、胎土・混和材・器面調整・色調などにもとづいて各指標部位に割り振り、互いに接合関係なくとも「同一個体」として扱い、器種を特定した。この際、口縁部は例え小片であっても「1点」としている。作業過程では必然的に、指標部位に割り振ることができない単独の底部片・胴部片が多く発生する。これらの破片をできる限り「同一個体」にまとめ、器種を特定せず別途計数した。
- 6) 本稿でいう「口径」とは、口縁部外端で計測した直径を指している。なお、かえりをもたない杯・皿蓋については、下方に折り返した口縁端部の外縁で「外端径」を計測した。
- 7) 森川実・大澤正吾「石神遺跡B期整地土・SD640出土の土器群－石神遺跡第3～5次・第10～12次」『紀要 2018』。
- 8) C期は從来「藤原宮期」とされてきたが、出土した木簡と土器から、少なくとも石神遺跡8・9次調査区周辺では、C期の開始年代は天武朝にさかのぼると考えられる。
- 9) 前掲註2)。